

95

「ストレスの時代」といわれて久しい。ストレスは、さまざまな世代に及び、さまざまな病を誘発する。そしてその原因の多くは人間関係にあるといわれている。人間関係がうまくいっていないのは、ストレスは無く、人間関係がうまくいかないというストレスはたまる▼教会は組織や建物ではない、というのは今や周知の事実であるといつてよい。教会は関係であり、交わりである。神との関係と人間関係、神と人、人と人との交わりの場である。それゆえ、教会にもストレスがあり得る。可能性としてではなく、実際に、現実にはストレスがある。そしてこのストレスもたまってくると、病気になる▼教会もストレスの真つただ中にあるのではないか。関係のあるところにはストレスがある。信徒同士、司祭同士、修道者同士、司教と司祭、司祭と信徒などの間に。「もう疲れた」という声があちこちで聞こえる。ストレスに押しつぶされそうになるとき、人はその場から逃げ出そうとする。その関係を断とうとする。職場から、学校から、そして家から出ようとする。人が信じられないようになって独りになる。教会の中でも同じことがいえるのではない。か▼昨年は国際家族年で、さまざまな家庭問題が浮き彫りにされた。家庭内の乱れた関係を正常化するためには対話が必要といわれた。教会でも「家族」がよく話題になった。そして教会も発言した。「対話」が必要だと。教会内のストレスも「対話の実行」で解決すると考える。(Y)

薬物依存症という病気がある。シンナーや覚せい剤、大麻などの薬物に依存し、そこからなかなか抜け出せない。アルコール依存と違い、薬物依存症者は社会に出る前の若い世代に多い。覚せい剤などは刑事事件とも結びつくだけに、薬物依存への偏見が強いが、最近では、市販されているせき止めの薬や精神安定剤などに含まれている鎮痛剤や鎮静剤などの依存症も増えているという。症状がひどくなると幻覚症状が出たりして、家族や人間関係のきずが壊されてしまう▼依存症になるまでにはさまざまな要因がある。人間関係のひずみや孤独感、個人に対する正当な評価の欠如、人間に対する信頼の喪失などである。依存症から立ち直るためには新たな信頼関係が求められるが、そのための施設は皆無といつてよい。かくして依存症者は精神病院で入院を繰り返すか刑務所に隔離されることになり、回復の希望は少ない▼この四月に九州で初めて薬物依存回復施設の「九州ダルク」が設立された。現在、二十代から三十代半ばの六人の男女が薬物依存から抜け出そうとしている。薬物に依存していた彼らが今はハイパーパワー(一人ひとりの心の中にいる神)に依存しようとしている。互いに病気であることを認めながら、仲間同士励まし合い、支援する人々の輪の中で回復を目指す▼「人が一人ではいるのはよくない」と神は言う。神は人を仲間として創造された。カネやモノに依存する人がいる中で、ダルクのメンバーは今、神依存症者になるようとしている。(Y)

96

今年はどうしようか。毎年、考えることであるが、その毎々がまたやってきた。「どうしようか」というとき、多くのワクがある▼人として。男として、女として。夫として、妻として。親として、子どもとして。信徒として、修道者として、司祭として。そのワクの中で何をしようかと考えると、いろいろと迷ってしまうかも知れない。私は一人なのに、その自分がさまざまな場にいるようなことをしようとしている。きりがなく、ねらいが定まらない▼今年はどうしようか、というとき、それは「何をしようか」ではなくて、「何であろうか」とすることが大切なのではないか。そして「何であろうか」と目的を設定するとき、それはただ一つしかないように思える。すなわちキリスト者であることである。男も女も、夫も妻も、信徒も修道者も、そして司祭も。キリスト者であること、それは限りなくキリストに似たものになること。これ以外に私たちが目指すことがあるだろうか。キリスト者であることは、だれにでもできること。ともにいるキリストに気づくならば。キリストが見えなければ、どんな神学も宣教論もむなししいのではない▼今年は戦後五十年周年でもある。だれもが平和を祈るだろう。その願いの一番奥にどうかキリストがいるように。さまざまな出来事の表面にどうか捕らわれないように。私たちの存在がキリストの現存のあかしとなるように、神の祝福を祈りたい。(Y)

新興宗教の魅力はどこにあるのか。何人かの方が語ってくれた。それは「聞くことにある」と。厳密には「聴くこと」と言うべきであろう。辞書を引くと、「聴く」とは「注意して聞く。聞く」として聞く。耳を傾ける」とある▼戦後五十年がたち、多くの人が戦争体験を語り始めた。それと同じように、教会内でもいろいろな人がいろいろなことを語り始めている。ただし、それは過去のことでない。現在のことである。今、教会のメンバーとして感じていること、必要と思うこと、もっとこうしたらよいと思われること、不足な点、悩み、苦しみなどである。それを聴く耳が教会共同体にあつたらよいと思う▼今では考えられないことも知れないが、かつて教会の中で「意見」を述べることは悪い意味での「批判」と取られ、さらには罪とさえ考えられていたと聞く。特に聖職者に対する批判は厳しくとがめられていた節もある。そのことが、教会にとって最も必要なことである「聴く」姿勢を培う上での障害となつたのではないかと多くの人は言う。▼「私たちが教会に求めるのは「聴いてほしい」ということ。でも今の教会は聴いてくれない」。教会は文字通り「教える会」だけになっているのではないか。教える前にもっと聴く必要があるのではないだろうか。「聴いてほしい」と望んでいる人はたくさんいる。「聴いてもらえない」が故に共同体を離れる人もある。このつづきや聴いてもらえるのだろうか。(Y)

「福音」は「良い知らせ」といわれる。救いをもちたす喜びのメッセージである。これは言葉で理解していても、体験することは難しい。典礼、特にミサの中で福音の言葉に耳を傾け、その解説である説教を聞いてもいまひとつピンとこない、というのが人々の本音ではなからうか▼次のような声をよく聞く。「ミサにあずかった感じがしない」「言葉が伝わってこない」「聖書と典礼」をゆつくり一人で読んだ方がいい」「新鮮味が無い」「とにかく、行かなければならないからミサに行くだけ」「お務めだから」。典礼は形骸化し、ミサ中の説教も味気ないものになっている。信徒は今の生活の中で福音を聞きながっているのではないか▼福音宣教が叫ばれている。福音は生きている神の言葉、復活して、今、生きている神のしるしである。復活した主が今、毎日の生活の中でなさっていることである。「良い知らせ」は聞く人に喜びをもたらす。それを聞く人は希望に満たされ、元気が出る。そして、聞いたこと、気付かされたことを伝える。これが福音宣教である▼信徒、未信徒を問わず、さまざまな悩みや相談を受けるとき、「福音」は「知識」ではないことを思い知らされる。抽象的な言葉そのものは意味がない。過去の出来事についての「教え」は役に立たない。現実から浮いた言葉は、力を持たない。少なくとも、それを日本の現実の生活に翻訳する必要がある。聞く人を励まし、希望と勇気を与えるのであれば「良い知らせ」とはいえない。(Y)